



Title	精神障がいをもつ人たちを地域で支える取り組み (2) : 沖縄訪問研修報告のまえがき
Author(s)	浜渦, 辰二
Citation	臨床哲学. 2016, 17, p. 154-157
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57578
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

精神障がいをもつ人たちを地域で支える取り組み（２）

——沖縄訪問研修報告のまえがき

浜渦 辰二

実社会対応プログラムのうちの「研究１：ネットワーク型研究」の一環として、精神障がいをもつ人たちを地域で支える取り組みについて考察するなかで、一昨年９月に学生有志達とともに北海道浦河町にある「べてるの家」の訪問研修を行ない、「〈報告〉精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み——「べてるの家」訪問研修報告」を本誌『臨床哲学』vol.16に掲載した。その活動の延長として、昨年８月１日～５日、大分と沖縄で精神障がい者が地域で暮らすのを支える活動をしている人びとを訪ね、インタビューを行った。以下は、その「沖縄訪問研修報告」を参加者それぞれの関心から執筆したものである。それまでの経緯と関連する活動をまとめて、「まえがき」としたい。

「「べてるの家」訪問研修報告」のなかにも現れていたことだが、「べてるの家」で学んできたことは、すばらしいことばかりとも言えず、いろいろと考えさせられることもあった。そこで、今度は、「精神障がいをもつ人が地域で暮らすのを支える」活動が、もう少し違う形で行われているという沖縄へ、研修に行くこととした。北海道に行ったメンバー６人のうち、学生３人が諸般の都合により今回は行けなくなったので、代わりに、永井佳子さん（からほりサロン代表）と永山亜樹さん（AJU 事務所）が加わってくれた。それぞれ、学生とは異なる、独自の観点から見学と考察を行ってくれた。

前回の「べてるの家」訪問研修にあたっても、背景となる状況を知っておくためにいろいろと学習会を行ったり、参考文献を紹介したことを報告でも述べておいたが、今回も、その後に増えた参考文献として次のようなものを挙げておいた。

- ・『精神医療』「特集：精神科病棟転換型居住系施設の争点：脱施設化か、再施設化か？」（古屋龍太、岡崎伸郎）、no.77、January 2015、批評社。
- ・『精神看護』「特集：あっと驚く ACT です」（近田真美子）、「体験レポート：イタリアのグループホームで当事者と共に過ごして見えてきたもの」（吉田育美）、January 2015、医学書院。
- ・『精神看護』「特別記事：さらに見えてきたオープンダイアログ：フィンランド、

ケロプダス病院見聞録」(下平美智代)、「特集：地域との「連携」がうまい組織は、こんな手法を使っている」(望月明広ほか)、March 2015、医学書院。

- ・ 斎藤環 (著+訳)『オープンダイアログとは何か』、2015/7/1、医学書院。

以上を踏まえて、2015年8月1日、私は別行動で、まず大分に行き、妙瑞寺^{みょうずいじ}で行われた、「NPO 法人 これからの葬送を考える会九州」主催の月例会で、講演「生老病死について—エンディングノートとリビングウィル—」を行なった後、同寺院で行われている「桜葬」を見学した(これについては別途報告することになる)。

翌8月2日：大分で、「NPO 法人 虹のかけはし」の「精神障がいをもつ人が地域で暮らすのを支える」活動をする「相談支援事業所 空(そら)」で相談支援員を務める松前香里さん(PSW、保健師、看護師)から、その活動について話を聞き、「障がい福祉サービス事業所 大地」(就労継続支援A型)の作業所を見せていただいた。

同日午後：沖縄入りをして、皆さんと合流。那覇泊。

8月3日：沖縄本島北部の「名護市障がい者関係団体協議会 地域生活支援センター ウェーブ」を見てバーベキュー大会に参加。那覇へ帰る途中で、「障がいを持った方の就労や生活をサポートする Associa Local Network Design」の「Café Associa」を見学。

8月4日：那覇市の「障害者のための地域生活支援・就労援助 ふれあいセンター」を見学。島村聡さん(沖縄大学)、永山盛秀さん(一般社団法人ハーネス理事)の話を聞く。沖縄県立看護大学の食堂で利用者の方々が働いているのを見学しながら、昼食。利用者たちとカラオケ(と言っても、利用者が楽しむ時間を参与観察させていただいた)。

8月5日：石垣島に飛び、そのまま船で西表島に入り、「株式会社ゆにばいしがき／共同作業所 スオウの木」を見学。

8月6日：船で石垣島に戻り、「株式会社ゆにばいしがき」の津嘉山航さんの話を聞き、グループホームを二つ見せてもらったあと、皆さんと分かれて、一足先に飛行機で大阪に戻った。

以上がおよその日程であるが、詳しくは、このあとの各参加者からの報告を参照いただきたい。

ところで、昨年の「べてるの家」訪問研修に先立つ準備作業においても、また、今回の沖縄訪問研修に先立つ準備作業においても、フィンランドの「オープンダイアログ」と「精神病院をなくしたイタリア」の参考文献を挙げておいた。

それと関連することだが、実は、9月13日から24日まで、フィンランドとスウェー

デンに行ってきた。フィンランド・ヘルシンキ大学では、サラ・ヘイナマー教授のオーガナイズにより、一つの講演と一つのセミナーを行った。また、スウェーデンでは、北欧ケアの研究でお世話になっているカーリン・ダールベリ元教授とパーソナルな対談を行い、そのオーガナイズにより、ボロース訪問看護センターとヨーテボリ大学（パーソンセンタードケア・センター）とで、二つの講演を行った。10日間で、次のような4つの異なる話を英語ですするというので、ハードスケジュールだった。

- “Dialogue in Husserl’s phenomenology and psychiatry” at an interdisciplinary workshop “DIALOGUE AND INTERSUBJECTIVITY”, at Helsinki University, Finland, 2015/09/16.
- “Intersubjectivity of Ageing - Reading Beauvoir’s *The Coming of Age*”, at the seminar for philosophy of Helsinki University, Finland, 2015/09/18.
- “Dialogue in Psychiatry and Person-centered Care”, at the Psychiatric Team for the Elderly in Borås, Sweden, 2015/09/21.
- “Intersubjectivity of Person-centred Care: a phenomenological perspective”, at the Centre for Person-Centred Care (GPCC), University of Göteborg, Sweden, 2015/09/22.



10:00-10:30 Sara Heinämaa (University of Jyväskylä): *Introduction*
10:30-11:30 Jaakko Seikkula (University of Jyväskylä): *Psychotherapy as embodied activity*
11:30-12:30 Shinji Hamauzu (Osaka University): *On dialogue in Husserl’s phenomenology of intersubjectivity and psychiatry*
12:30-13:30 Lunch
13:30-14:30 Kai Alhanen (Aretai Oy): *Meanings and experiences in dialogue*
14:30-15:30 Tadashi Kawasaki (Osaka University): *Dialogue and menace: Merleau-Ponty on intersubjectivity*
15:30-16:30 Minae Inahara (Osaka University): *The Art of Pain and Intersubjectivity in Frida Kahlo’s Self-Portraits*
16:30-17:00 Coffee
17:00-18:00 Joona Taipale (University of Jyväskylä): *Social invisibility*
18:00-19:00 Irina Poleshchuk (University of Helsinki): *On condition of ethical becoming: sensibility, enjoyment and displaced subjectivity*

なかでも、最初のワークショップ「対話と問主観性」（前頁のポスター参照）では、筆者の「問主観性」をめぐる基調講演の前に、もう一つの「対話」をめぐる基調講演を行ったのは、フィンランド「オープンダイアログ」の中心人物ヤーコ・セイックラ教授（ユヴェスキュラ大学）であった。そのことに気づいたのは、恥ずかしながら、行きの飛行機のなかで先述の『オープンダイアログとは何か』を読んでいた時であった。

また、10月22日には、いま「オープンダイアログ」を日本に紹介している代表者の一人である石原孝二教授（東京大学）をお招きして、阪大・臨床哲学研究室&東大・UTCP 上廣共生哲学寄付研究部門合同ワークショップ「障害の哲学：理論とその応用」を行った。筆者の発表「フッサル現象学と精神医学における対話」と石原教授の発表「対話的アプローチと障害の概念」の接点は、まさに「オープンダイアログ」であった。

他方、「精神病院をなくしたイタリア」については、8月8日首都大学東京で行われた「臨床実践の現象学会第1回大会」でたまたまお会いした近田真美子さん（東北福祉大学）から、前号の「「べてるの家」訪問研修報告」でも言及した『プシコ ナウティカーイタリア精神医療の人類学』の著者・松嶋 健氏のガイドでイタリア精神医療研修に行ってきたという話をうかがった。筆者たちの沖縄研修の話をしたところ、是非とも一緒に報告会をしましょうということに盛り上がった。こうして、10月25日（日）に「合同研究会 精神障害を持つ人が地域で暮らすのを支える：OKINAWA—ITALIA」が実現することになった（下のポスター参照）。以下の「沖縄訪問研修報告」も、同研究会で発表された報告に手を加えたものである（また、ポスターは、参加者の一人である永山亜樹さんの作品である）。

追記：本稿の校正の段階（3月7日）で、大阪大学理事（人権問題担当）より通知があり、「障害」という言葉が、単語あるいは熟語として用いられ、前後の文脈から人や人の状態を表す場合は、「障がい」と表記する、ただし、「（1）法令等の名称、（2）団体名、機関名等の固有名詞で漢字を使用している場合」などは例外とする、実施時期は「本通知日以降、できるところから順次適用する」という指示があったため、急遽、本報告についても、各執筆者の原稿も含め、「障害」「障病」とあった箇所を「障がい」と改めた。

OKINAWA

(第一部 9:00-12:00 講義室608)

第一部

9:00-9:30 「イントロ-北海道から沖縄へ」
高橋 二 (札幌大学)

9:30-10:00 「輪舞スワッチからの旅り語り」
永山亜樹 (AUI 事務局)

10:00-10:30 「北海道で語り継がれ続ける仙臺につける杜松みどり」
永山裕子 (からりサロンの代表)

10:30-11:00 「地域支那のあり方を考える―支那の問主観性―」
嶋田 謙 (大阪大学)

11:00-11:30 「輪舞詩と地域性」(座談会)
永山裕子 (立教大学)

11:30-12:00 第一部全席閉鎖

「精神障害を持つ人が
地域で暮らすのを支える」

10.25.Sun

大阪大学中之島センター (大阪市北区中之島4-3-53)
TEL: 06-6444-2100
WEB: <http://www.oki-ita.com/itc.jp/>

ITALIA

(第二部 13:00-17:00 講義室507)

第二部

13:00-13:30 「イントロ-イタリア精神医療の歴史的時間」
近田真美 (東北福祉大学)

13:30-14:15 「イタリア精神医療 視察報告-ジェノヴァ」
嶋田 謙子 (名古屋で訪問看護ステーション)
永山裕子 (からりサロンの代表)

14:15-15:00 「イタリア精神医療 視察報告-アレツツオネ」
西川 貴一 (社会福祉法人 木の芽福祉会)

15:00-15:15 休憩

15:15-16:00 「イタリア精神医療 視察報告-パルマディキエアーネ」
嶋田 謙子 (神戸女子大学)

16:00-17:00 第二部全席閉鎖

157

臨床哲学 17 号